

- 1 芹の根を離れぬみづの昏さかな
- 2 半月は爪にもありて桜貝
- 3 陶片の鋭さをもて轉れり
- 4 鉛筆に金の刻印暮れかぬる
- 5 地平線かたく結んで卒業す
- 6 鞆を漕ぐ天球に沿つて漕ぐ
- 7 佐保姫の頬は残照だと思ふ
- 8 ぬぐひてなほ手にある湿り初端午
- 9 草笛や車道のど真ん中帰る
- 10 母の日の母の実家やなにもせず
- 11 名山のみづのかけこむ代田かな
- 12 並べたる瓶に南風の鳴り通し
- 13 水馬や水面は私語を謹まず
- 14 凹凸の身体あづけし籐寝椅子
- 15 城壁に黒くはりつく蜥蜴の尾
- 16 実のならぬ木にも南風の吹く日かな
- 17 先生も猫背になりて冷奴
- 18 聞こえなくなるまで夏の海潜る
- 19 峰雲の骨組みを考へてゐる
- 20 許されずして黒々と洗ひ髪
- 21 夕涼や大魚の骨が爪楊枝
- 22 迷彩のジープ連なる炎暑かな
- 23 花束のやうに波濤へ白日傘
- 24 口笛の辻に消えたる夜の秋
- 25 眠り疲れて朝顔の果ての紺
- 26 花火果て傷の如くに星燦々
- 27 降りそめに送火荒くなりけり
- 28 送火の匂ひのなかに暫しをり
- 29 新涼や海割つてくる帆の白し
- 30 銅鑼ごとに夜の入れ替はる村芝居
- 31 流灯や水面に指の記憶あり
- 32 峡に風吹き下ろすまで踊りけり
- 33 隧道に風を集むる九月かな
- 34 星月夜バイク走らせつつ歌ふ
- 35 魚臭き路地に民宿草の花
- 36 翠黛は雨に煙りぬ秋裕
- 37 白帝の三面鏡として大河
- 38 番犬の吠え合つてゐる良夜かな
- 39 魚の吐く気泡に気泡添ふ夜長
- 40 貝殻を灰皿とせる浦祭
- 41 秋時雨椅子を連ねて眠りけり
- 42 フィルムめく車窓に街や秋の暮
- 43 番号で呼ばるる役場枯葎
- 44 従軍ののちの白寿や花八つ手
- 45 しぐるるや口の欠けたる夫婦猪口
- 46 空き部屋に机が一つ冬日濃し
- 47 秘め事のやうに兎を抱へをり
- 48 山茶花やトタン葺きなる屠畜場
- 49 闇汁の底をごろつく音すなり
- 50 着ぶくれて人の恋路を聞くばかり

- 51 綿虫や祖母の遺品のみんな綺麗
52 波郷忌の一行詩めく鼻梁かな
53 着ぐるみの中より嚏また嚏
54 凍星やどれも立方体の街
55 合鍵はポストの裏にポインセチア
56 鳥籠のがらんだうなる聖夜かな
57 手袋ともみくしやになる乗車券
58 しんねうのやうに首病む賀状書き
59 波と波重なり合へる去年今年
60 年逝くや臥せば身体の血も平ら
61 まなうらに海をうつせる初寝覚
62 初夢に一期の秀句置き忘る
63 大旦横丁の猫の上に猫
64 若潮の底を泳いでゐる言葉
65 一滴の重くひろごる初硯
66 福引の音の明るき外れ玉
67 家訓なるものを作らむ寝正月
68 松過や屑入れを折るためのびら
69 一月の水より清き言葉告ぐ
70 人参の顔とおぼしき箇所掴む
71 大寒や月の漏れたる月見蕎麦
72 隕石落下二千年後の薄氷に
73 きさらぎの大河と海の逢瀬かな
74 水甕に縄の紋様百千鳥
75 人待てばまなぶた重し豆の花
76 生れし牛幾度も転げ風光る
77 春昼や湯を吐いてゐるコンキリエ
78 大東京くるくる石鹼玉の中
79 万愚節電子書籍となる聖書
80 絵の中の人に影無き遅日かな
81 春の夜の人形の目の深みどり
82 春闘や夜通し廻る洗濯機
83 連山を繋ぐ電線春愁
84 ワイパーにかき消されたる春の虹
85 花曇り海黝々として匂ふ
86 初端午轍の水のうす濁り
87 曲止んで南風を聞くヘッドホン
88 ハンカチのひらり職業安定所
89 三男に生まれてけふの金魚かな
90 水切りの飛沫はみづに帰り朱夏
91 軽薄な顔の金魚をまづ掬ふ
92 腐れ縁とは木耳のかたちとも
93 油絵に馬百頭の大暑かな
94 サングラス眉毛豊かに動きけり
95 自伝なら夏の海より書きたしよ
96 贅肉を吊し上げたるハンモック
97 街抜けて南風の尾の風化せり
98 鎮魂の塔の真白き驟雨かな
99 ジェラートを売る青年の空腹よ
100 三伏や吹かれて肋めく砂丘